



最新「気象の事典」

和達清夫 監修

東京堂出版、1993年3月発行
カラー口絵8ページ、
本文607ページ 定価9,800円

「新版気象の事典」が20年ぶりに「最新気象の事典」として全面改訂された。序文によると、「新版」が発行されたのは静止気象衛星「ひまわり」1号が打ち上げられる3年前であり、地球温暖化・オゾンホール・酸性雨・森林破壊・砂漠化などの地球環境問題も今程話題になっていないころであり、「最新」版では、この間の気象学・気候学と気象技術・気象事業の発展・進歩を背景に新たに生まれた専門語や日常の天気関連用語を含めて、改めて項目を厳選して編集にあたられたとのことである。

なるほど、「新版」には地球温暖化やオゾンホールなどの項はない。一方、「最新」には『地球温暖化』、『オゾンホール』がともに3ページにわたって要領よく解説されている。例えば、『オゾンホール』（関口理郎氏執筆）では、オゾンホールを「極地方で極夜直後の春にあたかも穴があいているようにオゾン層が薄くなる現象」と定義したうえで、その現象の発見から現在までの推移を〈観測事実〉として示し、オゾンホール形成のメカニズムの定説を〈オゾンホールの理論〉で説明する。そして、最後に、オゾン層保護のための国際的取り組みについて、〈オゾン層保護条約〉として解説している。なかなか凝った解説ぶりであり、専門家でない者にとってもその項のポイントを容易につかむことができるであろう。

この事典は原則として小項目主義で項目が選定され、各項目が短い解説でまとめられているが、特に重要と思われる項目については大項目として立項し、関連事項をまとめて記述し相互関係を明らかにすることにも意が払われている。上で述べた『オゾンホール』がまさにそうである。また、「新版」にはない『エル・ニーニョ』（浅井富雄氏執筆）を引いてみると、〈エル・ニーニョの由来〉で語源と本来の意味を区別して示し、その後の〈太平洋熱帯海域の海況〉で海水温と海流と

の関係からエル・ニーニョ生成のメカニズムを説明している。さらに、〈エル・ニーニョの一生〉で発生から消滅にいたる経過をこれまでの研究成果にのっとったシナリオで示し、最後に、〈エル・ニーニョと南方振動〉では大気・海洋・陸面相互作用系の動態の側面としてエル・ニーニョを把握すべきと結んでいる。短く要領のよい解説をその第一の使命とする事典のなかでも珠玉の一項とみた。この外にも、明快な解説がいくつもあるがすべてを紹介できないのが残念である。

次に本事典の多くを占める小項目（短い解説）の何項かにふれて、その特徴の一端を紹介することに変えたい。

最近、我が国でも大きな風災害を起こす大気現象の一つとして注目されている『ダウンバースト』は「最新」では立項され、コンパクトに解説されている（花房龍男氏執筆）。その中で、「大型のダウンバーストをマクロバースト、小型のものをマイクロバーストという」との説明がある。一方、同現象のもう一つの呼び名である「マイクロバースト」とは思い、マ行を引いてみると、これは項目として立てられていない。惜しい。

『気圧偏差』（石井幸男氏執筆）、『最高気温』（菊池原英和氏執筆）などの現在でも意味の変わっていない用語は「新版」と全く同じである。一方、「一酸化炭素」、「一酸化二窒素」などは利用価値の比較的小さい用語の範疇とみられたか、「最新」の項目から割愛されている。これはこれでよからう。

新しい用語としては、『ウエザーグッツ』（平沼洋司氏執筆）や『ウエザーマーチャングイジング』（朝倉正氏執筆）など最近の気象産業の動向を象徴するような用語の解説も取り入れられている。タイムリーである。

最後に、本書では、各項目に英語訳が付加されている（「新版」にもある）が、筆者はこれによって幾度も恩恵を受けてきたことを記しておきたい。

以上、簡単に「最新気象の事典」をのぞいてみた。「最新」の執筆者数は61人で、「新版」の39人に比べて大幅にふえており、その顔ぶれは多彩であり、これからみても「新版」を確実に増強していると確信できる。とにかく使ってみることがよからう。

（気象庁観測部 中井公太）